



TITLE:

サル胃の前癌病変としての腸上皮化生の検索(III 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

河内, 卓; 松倉, 則夫; 佐野, 友乃

---

CITATION:

河内, 卓 ...[et al]. サル胃の前癌病変としての腸上皮化生の検索(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1979, 8: 47-47

ISSUE DATE:

1979-01-13

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162790>

RIGHT:

あるのに対し、閾値付近では2.5秒前後であった。刺激速度の減少にともなう、反応潜時は単調増加の傾向があった。刺激呈示時間が閾値に影響を及ぼすことが示唆されたが、今後、呈示時間をパラメータとして閾値の測定をする必要があるとおもわれる。

### ニホンザルの社会的認知能力の解析

鈴木 延夫(北大・文)

過去30年間、ニホンザルに関する社会行動の研究は、フィールドにおける観察研究を主体にして大きな成果を収めてきた。しかし、社会科学や人文科学の境界領域としてこの方面の研究に今後より一層の学問的飛躍を期待するならば、野外研究における観察技法の問題を再検討する必要がある。つまり、観察し研究する側の人間と観察対象になるニホンザルとの社会行動に関係する感覚知覚能力の比較検討を行い、観察技法の改善を必要に応じて心掛ける必要がある。

本研究ではこうした問題意識から、安定した社会生活を続けている1群のニホンザルを研究対象にし、彼等の視知覚に依存した社会的な認知能力を実験的に研究することが主要目的と成っている。

実験は京都大学霊長類研究所の第1放飼場内で集団飼育されてきた約60頭の高浜群を対象にし、同飼育場内において実物大に引伸したカラーの顔写真を弁別刺激材料に使ったオペラント条件づけ方式で行った。実験条件毎の正反応には大豆を報酬として与え、条件づけの完成規準を正反応率80%とした。また、実験手続きでは研究対象であるサル達の自発的な反応意欲を最大限に活用するようにし、研究者からサル達に課する固定した実験手続きを最小限に抑制した。

実験の結果については、弁別刺激の性格に応じて正反応率の変動を分析し、群構成員に関するニホンザルの認知能力を考察する予定であったが、実験手続の特殊性から共同利用研究の指定期間内には、分析や考察に必要な具体的データを得るに至らなかった。

しかし、昭和53年度の国内流動研究員制度の枠内で本

研究は発展的に継続されており、53年度中にはその成果が十分期待されるところである。

### サル胃の前癌病変としての腸上皮化生の検索

河内 卓・松介則夫・佐野友乃

(国立がんセンター)

#### I 研究目的

日本人には胃癌が多い。日本のサルの胃に胃癌の前癌病変と考えられている腸上皮化生が存在するかを検索する。

#### II 研究計画

- 1) サルの胃を含めた消化管を特に検索したい。その為、他の臓器を使用する他のグループとの共同実験殺が、サルを有効に使用することになる。
- 2) サルの胃を摘出した後、新鮮な状態で、テストテープ法によって腸上皮化生を生化学的に診断する。
- 3) 胃の粘膜の一部を採取し、酵素活性を測定する。
- 4) 胃の粘膜の一部をホルマリン固定し、病理組織学的に検索する。

#### III 研究の経過

ニホンザル、ヤクザルを中心とする25匹のサルについて、腸上皮化生の存在をテストテープ法によって酵素学的に、また、ホルマリン固定標本を病理組織学的に検索した。

#### IV 研究成果

検索した大部分のサルの胃には萎縮性胃炎がみられたが、明らかな腸上皮化生がみられたのは一匹であった。また、胃癌は見つからなかった。

サルは実験的に胃癌が出来にくいことが知られているが、自然界のサルも、胃癌のみならず腸上皮化生も非常に少ないことが、今回の検索から推測される。

#### V 研究の考察、反省

今回の検索で、サルの胃の腸上皮化生が初めて明らかにされた。しかし年令の高いサルを重点的に検索することは出来なかった。今後、特に年令の高いサルの例数を増やして検索することが必要と考えられる。

## 3. 研 究 会

### 第6回 ニホンザルの現況研究会

1. 期日 昭和52年5月28, 29日
2. 場所 京大霊長類研究所一階会議室
3. 参加者数 延べ約50名
4. プログラム

テーマ：ニホンザルの分布と保護に関して

1. 各県下ニホンザル大量捕獲の動向について  
関西ニホンザル研究会 東, 大澤他.  
県知事捕獲許可認可数についての基本的討論  
コメント提出者 丸山, 東, 鈴木
2. 野猿公苑の問題について